

部活終了後の部室。

全開の窓から流れ込む盛夏の風は、陽が落ちたこの時間でもまだ熱を帯びている。額や首筋にじわりと滲む汗を引かせてはくれない。

どこかの教室から拝借してきた机で部誌を書きながら、赤葦はきつちりと締めていたネクタイを少しだけ緩めた。

机を挟んだ赤葦の向かい側、椅子の背を抱えて座っていた木兔が不意に、部誌に添えていた赤葦の手の指を自分のそれでトントンとつつく。

「おまえ、そろそろじゃない？」

木兔に言われ、赤葦は自分の発情期が近いことを知った。

体調はいつも通りで、たいていのオメガが味わう発情期前特有の不快感などはまったく感じていないが、アルファの中でも特に鋭敏な感覚を持つ木兔の言葉を疑う気は微塵も起きなかった。

「においますか？」

「少しね。匂いが甘くなってきた。まだ俺しか気づかないレベルだろうけど」

赤葦の耳元でスンスンと鼻を鳴らしていた木兔の顔を、ぐっと思い切り遠くへ押しやる。  
「暑苦しいっス」

「ひでえな」

「どっちがですか。これ、木兔さんの仕事ですよ」

「だって赤葦が書いたほうがきれいだしわかりやすいじゃん？」

じゃん？ じゃねえよ……。

無駄を承知で部誌を木兔の目の前に突き出してみたが、予想通り軽く受け流されて赤葦は溜め息をついた。

木兔は木兔で、赤葦の塩対応には慣れっこになっている。というか、むしろこの塩分強めな対応を期待している部分があった。口では素っ気無いことを言いつつも、赤葦は基本木兔の発言を疑ったりしない。それが可愛く思えるし嬉しいのだ。そして木兔が近づけば、赤葦の匂いはふわりと濃くなる。自分のアルファフェロモンに赤葦が反応しているかと思うとぞくぞくする。……なんてことを木兔が考えているなんて赤葦が知ったらどうなることか。怖くて言えないけれども。

少々特殊な事情があつて『オメガになったばかり』の赤葦は、自分の発情期（ヒート）のサイクルをまだきちんと掴めていない。アルファである木兔に指摘されるまで発情期が

近いことに気づかないなんて、本来あるまじきこと、そして危険極まりないことなのだ。

しかし、たいていのオメガが大なり小なり味わったことがあるであろう「オメガによることの恐怖」を体験したことも、重いヒートを経験したこともない赤葦は、ヒートの辛さ、ひいてはオメガの辛さがわからず、バースについてはやや軽く考えている節があった。

尚ここでは、『発情期』は「生殖行動への欲求が増す時期」、『ヒート』は「発情期に伴いオメガの肉体や精神に表れる症状、その時の状態」という意味で使っている。

「今回は短いな。一ヶ月か……」

鬱陶しそうに呟きながら赤葦はスマホのスケジュールアプリを開いた。今日からちょうど一ヶ月前のところに赤いバツ印がついている。

個人差はあるが、発情期はだいたい三ヶ月ごとにくるものである。しかしオメガになりたての赤葦の発情期の間隔はかなり不順だった。前回は一ヶ月前。前々回はその二ヶ月前。ヒートそのものの期間も数日から十日間とまちまちだ。それがまた、赤葦のヒートに対する無頓着さに拍車を掛けていた。

「ほら」

木兎はエナメルバッグから、さつき脱いだばかりの自分のＴシャツを取り出して赤葦に手渡した。練習中に着ていたもので木兎の汗がたっぷりと染みこんでいる。

「……ありがとうございます。お借りします」

丁寧な言葉に反して赤葦の表情は険しい。

「そんな嫌そうな顔すんなよ。俺だってこんな汗臭いの渡すの恥ずかしいんだからさー」  
「嫌なわけじゃないです」

普通なら他人の汗が染みこんだ服など触れるのも嫌なものだが、赤葦は木兎の汗の臭いが嫌だなんて微塵も思っていない。それどころかそのＴシャツに顔を埋めたい衝動に駆られている。

赤葦が嫌なのはそこなのだ。木兎の匂い、つまりアルファのフェロモンであるが、それが抑制剤よりも自分のヒート抑制にてきめんの効果を發揮してしまうところに引っ掛かりを覚えるのである。

赤葦のヒートは一般のオメガに比べてまだ軽いほうだ。それでも抑制剤をまったく飲まないわけにもいかない。体の不調がそれほど表れなくても、そしてほとんど自覚がなくても、アルファやベータを「誘う」オメガのフェロモンを発しているからだ。

しかし抑制剤には副作用がある。その副作用は、体が怠くなったり頭が重くなったりと、

バレエボールに全力で打ち込みたい赤葦にとつては迷惑な症状だった。

木兔のアルファフェロモンの力を借りると、副作用のほとんどないごく軽い抑制剤を摂取するだけで済む。そのことに気づいてから、発情期がくると木兔の匂いのついた私物を借り、ヒート症状を抑えるのが習慣になっっている。

「俺の匂い、直接嗅げばもつと効果があるんじゃない？」

「必要ありません」

意味ありげにまた顔を寄せてくる木兔の接近を避けるように椅子から立ち上がり、赤葦はきっぱりと言い放つ。

恋人でもあるまいし、直接他人の匂いを嗅ぐとか、いくらなんでもおかしすぎるだろう。「普通オメガつてさー、アルファの匂いを嗅いだらムラムラしちゃうもんだろ？　なのになんで赤葦はムラムラしないで落ち着いちやうんだよー」

「そんなの知りません。ていうかムラムラしてる暇なんてないんですよ。インハイの後はすぐ夏合宿、夏合宿が終わったらすぐ春高の東京都一次予選が始まります。バレエ以外のことに気をとられている時間、ありますか？」

「今バレエの話してねーじゃん」

「え？　バレエの話が一番重要じゃないんですか？」

「……いや、そうだけどおー……、そうじゃないっていうかー……」

アルファがオメガの誘引フェロモンに反応するのと同様に、オメガもまたアルファのフェロモンによって性的欲求を刺激されるのが普通である。しかし赤葦の場合、「普通」に当てはまらず至って理性的だ。……というか、究極的に鈍かった。バースのフェロモン等関係なく、赤葦の気を惹きたい木兎の露骨なアピールにも気づかないのだ。

色恋に無関心そうでクールなところは赤葦らしくていいと思う一方で、軽い口調とは裏腹に、木兎は赤葦の警戒心の薄さやバースに対しての頓着のなさを本気で心配している。ヒート中のオメガの誘引フェロモンがどれだけアルファやベータに強大な影響を与えるか、学校の保健体育の授業でも繰り返し教えられるはずだが、赤葦はそれを他人事のように考えている風である。

本人の意思とは関係なく劣情を駆り立てられ、体が欲望に支配されてしまう感覚はとてもの恐ろしいものだ。……と言っても木兎はまだ我を失うような経験を実際にしたことはないが、自分のバースが明らかになった幼少の時からその恐ろしさを嫌と言うほど聞かされてきた。両親ともにアルファなので、その経験談は数多く、しかも濃かった。

自分の心や体が自分でコントロールできないようにされてしまうなんて、確かに気味が

悪いとも思う。

ただしそれは相手による、と気づいたのは赤葦のオメガフェロモンの匂いを知ってからだ。

好意を持っていないどころかまったく知らない相手は絶対に嫌だけれど、赤葦に自分分の意識と体を支配されるのも悪くない。……などと少々倒錯的なことも考えたりする。もちろん赤葦がそれを望めば、の話なのだが。

赤葦がオメガでなくても、赤葦の気を惹きたがっている人間は大勢いる。まず赤葦の目の前にいる男がその筆頭だ。

すぐに木兔の頭に思い浮かぶ心当たりだけでも一人、二人、三人四人……、と実に多すぎる。

(……ていうかそれ止めろよ。勃つから……)

赤葦は眉を顰めながらも、木兔の汗まみれのTシャツに鼻を突っこんで深呼吸していた。これを無自覚でやっているのだからオメガの本能(というより赤葦の素の性格かもしれない……)とは恐ろしい。

木兔は泣きたくなる気持ちをグッと堪えて天を仰いだ。

※

既述の通り、赤葦のバース事情は少々特殊である。

その特殊事情を簡単に言ってしまうなら、アルファ、ベータ、オメガの、どのバースにも属さない状態から『変異して』最近オメガになった、ということだ。

赤葦が自分のバース変異に気づいたのは、——いや、気づかされたのは、今からおよそ一年前、高校一年の夏だった。

近隣の学校との練習試合後、チームミーティングを終えるや否や、大多数のバレー部員たちは一斉に体育館を後にした。残っていたのは木兔を含む自主練常連組の数人で、赤葦も当然のようにその中の一人であった。入部してまだ半年経っていないにも関わらず、制限のない木兔のスパイク練に文句も言わずに付き合うセッターはすでに赤葦だけだったのだ。

木兔に腕を掴まれたのは、スパイク練習にボールカゴをコート内にセットし終えた時だ。



「水分補給したら始めましょう」

いつものことながら、少しの休憩時間も待つていられないのかと半ば呆れながら声を掛けたが、木兔はなにも答えず赤葦の手を引いて体育館を出た。

引かれて行った先は体育館の裏。木々の陰になり風の通るその場所は、サウナ状態一歩手前の体育館内とは違ってかなり心地の良い場所だった。

火照った頬を爽やかな風が撫でていく。その日の練習試合で赤葦は、一年生で唯一、スタメンフル出場を果たしていた。それだけでも気分が高揚するのには充分だったが、自分の上げたトスが木兔によって砲弾のように相手コートに叩き込まれる快感に酔っていた。浮かれていたと言ってもいい。いつもは怠けて固まりがちな表情筋もこの時ばかりは緩んでいたと思う。

対して、コート外では常に賑やかで鷹揚な雰囲気を感じている木兔は、試合後からずつとなにかを考えこんでいるかのように静かだった。

白い壁に凭れ、俯いたまま木兔は黙っている。木兔が突飛な行動にでるのはわりといつものことで、なんの疑問も持たずに素直にその場所へと引つ張って行かれたが、木兔の様子がいとも違ふ、さすがになにかおかしいと赤葦が思い始めた時、ようやく木兔が一文字に結んでいた口を開いた。

「おまえ、抑制剤飲んでないの？」

木兔からの思いがけない問いかけで、自分たちの周りの空気が凍りついた気がした。大袈裟でなく赤葦の呼吸は一瞬止まったし、こめかみの辺りが引き攣り、鼓動は嫌な感じに速まった。

よほどの事情がない限り人は自分のバースをオープンにしたりしない。他人にバースを訊ねることもタブーに近い。相手がオメガの可能性があるならなおさらである。昨今、オメガ蔑視・差別の風潮が薄れてきたとは言え、完全になくなったわけではないからだ。

赤葦もそれまで自分のバースを誰にも教えていなかったし、訊かれてもいない。だが、誰から見てもわかり易くアルファ性である木兔に抑制剤について言及されたということは、「おまえはオメガである」と断定されたのと同じことだった。木兔による断定は、くだらない冗談として流してしまうには説得力と信憑性がありすぎる。

しかし数ヶ月前に受けた定期バース検査では、赤葦のバースは曖昧な特殊バースのまま、オメガにはなっていないかなかったはずである。『変異』の可能性があることは教えられていたが、変異とはこんなに急激に起こるものなのか、赤葦にわかるはずもなく、ただ困惑した。

「えーと……」

自分の特殊なベース事情をどうやって、そしてどの程度説明したらいいだろうか。いや、そもそも説明する必要があるのであろうか——。唐突に与えられた衝撃が大きすぎて上手く考えが纏まらない。

「俺、抑制剤は持っていません」

この数分で、思考を止めようとする頭を無理矢理フル回転させて言えた言葉は結局これだけだった。

抑制剤を持っていない理由はだいたい限られている。オメガではないから、単に持つてくるのを忘れたから、もしくはすでに決まった『ツガイ』がいるから。

常識的に考えて、発情期を既に迎えているオメガが抑制剤を持ち忘れるなんて迂闊すぎてあり得ない。そして高校生の赤葦に、結婚相手よりも重く濃い関係を意味するツガイがいるというのも考えにくい。つまりこの場合「オメガではないから」が一番妥当な捉え方である。

しかし木兎は、アルファの中でも特に鋭敏な自身の嗅覚によって、その常識的で妥当な選択肢を端から排除しているらしかった。

「んー、俺もずっと赤葦はベータなんだと思ってた。今まで赤葦からこういう匂いしたことないから」

一般的にオメガ性の身体的特徴は、小柄で柔和な顔立ちだと言われている。その点でも、木兔には及ばずとも長身でガタイもよく、どちらかと言えばキツめで硬質な顔立ちをした赤葦は、オメガには見えなかったはずである。

「でも、練習試合の途中から近くで甘い匂いが始めて、たぶん俺にしかわからないぐらいの薄くい匂いだったけど、先輩たちや他のレギュラーたちとはちよつと違つて——」  
試合中のことを思い出しながらのたどたどしい話しかたではあったが、赤葦の動揺と焦燥を煽るには充分な内容だ。

壁から背を離して木兔が赤葦の前に立つ。顔を耳元に近づけ、木兔は赤葦にトドメを刺した。

「ここに連れて来てはつきりした。やっぱりこれ、おまえの匂いだ」

耳の奥でザアザアと音が響いている。血の気が引く音を赤葦は生まれて初めて聞いた。頭の中が真っ白になるという経験も初めてした。人はパニックに陥ると文字通りなにも考えられなくなるものなのだなど、後にこの時のことを思い出して感心したほどである。

自分が特殊なバース性であることはもちろん承知していた。ある要因が揃うとバースが変異する可能性があることも聞かされてはいた。しかしそれはただ「聞いて、知っていた」だけの話だった。実際自分に起こり得ることとしてきちんとしてきちんと理解も納得もしていなかった。

し、覚悟してなどいなかっただのだ。

「……木兔さんが言いたいことはわかりました。ただ、さつきも言いましたけど、俺、抑制剂は持つてないんです。……でも少し思い当たることもあるので、今日はこのまま早上がりさせてください」

指先が、膝が、小さく震えていた。木兔に答える淡々とした自分の声が、どこか遠くから聞こえていたような気がする。

この時木兔がどんなリアクションを取ったのか、赤葦にはつきりとした記憶はない。ただ、自分の首に巻いていたタオルを赤葦の首に掛けたことだけは覚えていてる。

ごく微量ながらもフェロモンを発しながら、抑制剂も飲まずにふらふらと歩き回っているオメガに近づこうとするアルファやベータを遠ざけようとしてくれたのかもしれない。本能的なものが働いたのか赤葦もそれを拒まず、あろうことかその後、かかりつけ医院のバース専門科で診察を受けるまですつと木兔のタオルを首に掛けたままでいた。

学校を出る際、赤葦は母親に連絡をし、その足でバース外来を受診したい旨を伝えた。それだけで彼女は、自分の息子が今どんな状況になっているかを察したらしい。

赤葦が子どもの頃から診てくれていた主治医も同様である。赤葦が受診の理由を詳しく

話す前に、バース判定の血液検査を受けるよう指示してきた。

それも当たり前前で、特殊なバース性を持つ赤葦の、定期的なバース検査以外での突然の受診理由など限られているからだ。

名前を呼ばれ、母親と共に診察室に入るよう促される。

デスクの上に置かれた赤葦の血液検査の結果を見ながら、初老の主治医は穏やかに、しかしきつぱりと告げた。

「バース変異ですね。自分でももうわかっていると思うけど、京治くん、君の今のバースは『オメガ』です」

「……はい」

頭に浮かんだのは、やっぱり、という一言だけだ。衝撃はもう、木兔によって充分与えられていた。この時には学校でのような動揺は治まっていて、医師に答える声はいつもの自分と同じ平淡なトーンだった。

元来人は、雌雄で分けられる性別の他に第二の性と呼ばれるバースでも分類されている。人口に占める割合はやや少数で、知力体力面で優れており、社会的に優位種と見做されている【 $\alpha$ 】アルファバース。人口の大多数を占め、目立ったバース的特徴のない【 $\beta$ 】

ベータバース。人口に占める割合が最も少なく、男女関係なく妊娠出産ができる【 $\Omega$ 】オメガバース。

赤葦はこのどのバースにも属さない『アンダーバース (underverse)』と呼ばれる特殊なバース性だった。

血液型は、父、母の両方から受け継いだ遺伝子型で決まるものだが、バースの場合は違う。父親か母親、どちらかのバース因子だけを受け継ぐ。アルファなら $\alpha$ のみ、ベータなら $\beta$ のみ、オメガなら $\Omega$ のみといった具合いで、バースの因子が混ざり合うことはない。

だが希に、数万人に一人ぐらいの低い確率で、因子の組み合わせ違った子どもが産まれる。 $\alpha\beta$ 、 $\alpha\Omega$ 、 $\beta\Omega$ などの、いわゆる複合因子というタイプだ。このタイプは、アルファの因子を持っていても生粋のアルファのようになにか突出した才能が表れるわけでもなく、オメガの因子を持っていても性別が「男」なら妊娠出産はできない。

それがどのバースにも属さない『アンダーバース』だ。

特徴は一般的なバースであるベータに近いので、だいたいは仮のベータとして過ごすことになる。

そしてこれも希な現象ではあるが、複合因子が単一因子に変化することがある。

『バース変異』と呼ばれる現象だ。

$\alpha\Omega$ 、 $\alpha\alpha$ 、 $\alpha\Omega$ の複合因子を持ったアンダーバースは、強烈なアルファ、または自己と相性のいいアルファに出会った時はオメガに因子が偏り、オメガへと変異する。そして強烈なオメガ、または相性のいいオメガに出会った時はアルファに因子が偏り、アルファへと変異するのだ。

アンダーバースの時の特徴はベータに最も近いのに、ベータに変異することがないのがおかしなところであるが。

赤葦は父の $\beta$ 因子と母の $\Omega$ 因子を受け継いだ $\alpha\Omega$ というタイプだったので、変異する可能性があるとしたら「オメガ」だとは伝えられていたが、自分の特殊体質をたいして重く受け止めてはいなかった。もともとこの特殊体質を持つ人は極めて少なく、変異の確率も非常に低いと言われていたからだ。

しかし鼻谷学園に入學し、赤葦は木兎と出会ってしまった。

人よりも上等な肉体、優れた身体能力、そして他を惹きつける華やかで圧倒的なオーラ、それらのすべてを手に行っている木兎は、誰から見ても疑いようのないアルファだった。実際、両親が共にアルファの、生粋のアルファである。



赤葦が中学生の頃から一つ上の木兔の名前は全国区だったし、木兔が高校二年になった頃にはすでに全国五本の指に入るスパイカーであった。ゆくゆくは日本の代表として世界と戦う選手になることは間違いない。

コート外から見ている時もそうだったが、コート内で傍らに立って浴びる木兔のアルファオーラは凄まじかった。

赤葦のバース因子が木兔の強烈なアルファ性に影響され、オメガに偏ったのもある意味自然な流れだったと言える。

「とても落ち着いているね。心当たりがあるの？」

主治医は赤葦の凧いだ目を興味深そうに見ながら訊ねた。

非常に稀なバース変異を起こしたこと、昔ほど差別や蔑視の対象ではなくなったとは言え「オメガ性」になったこと。赤葦はまだ十代の高校生だ、普通なら衝撃と動揺で取り乱してもおかしくはないのに、診察室に入ってきた時からずっと表情も変えず狼狽えた様子も見せていない。受け答えも実に落ち着いたものだ。

医師のこの問いにも、赤葦は静かに一言「はい」とだけ答えた。  
ところが。

「そのタオルの持ち主かな？」

そう指摘され、ようやく自分が木兎のタオルを首に掛けたままであったことに気づく。

医師の言う「心当たり」の顔が脳裏に浮かび、鼻腔を満たしている彼の匂いを急激に、そして強烈に意識して、赤葦は謎の恥ずかしさに見舞われた。

「……………たぶん、そうです」

熱くなった頬に感じる母親の視線も、医師から向けられている穏やかな笑みも居た堪れなくて、答える声が少し上擦った。

たぶん、と言ってはみたが、赤葦は確信していた。

疑いようなどなかった。

『アンダーバースがオメガへとバース変異を起こす要因は、強烈なアルファ、または相性のいいアルファと出会うこと』

赤葦京治は木兎光太郎に影響されてオメガになったのだ。

翌日、借りていたタオルを返す際に、赤葦は自分の特殊なバースについてを木兔に打ち明けた。

これまでずっと、バースの定まらないアンダーバースであったこと。アンダーバースは特定の要因が加わるとバースが変異すること。そして赤葦のバースがオメガ性に変異したということ。

部活が始まる前、体育館裏の前日と同じ場所で木兔と向き合っていた。心地良いはずの風も、耳を覆いたくなるほどの蝉時雨も、この時の赤葦にはまったく届いていなかったと思う。自分はわりと凶太い性格だと思っていたが、他人に自分のバース事情を明かすことはやはりかなりの緊張を伴うことだった。

「じゃあ今日は抑制剤飲んでるんだな。体は？ キツかったりしねえの？」

耳慣れない単語が出てきたからか、そもそも他人のバースにさほど興味がないのか（またはその両方か）、木兔の反応は、ただ単純に赤葦の体調を気遣うだけのものだった。

深刻に悩まれたり引かれたりするのも困るが、本来はデリケートで取り扱い注意の但し書きがつくべき内容を、風邪が治ったぐらいの調子で軽く受け止められたようで拍子抜けした。まあそれはそれで、鷹揚な木兔らしいと言えば木兔らしい反応なのだが。

「はい。薬は昨日処方してもらいました。……自覚がなかったぐらいなので、一番弱い抑

制剤ですが。体調はいつもと変わりません。悪くないです」

自覚がなかった分だけ「ヒート」という単語を使うのが気恥ずかしかった。

しかしその気恥ずかしさも、屈託のない木兎の笑顔があっさりと吹き飛ばしてしまった。  
「そっか！　じゃあ今日は昨日の分もトス上げて！」

赤葦の体調が崩れたのは、部室で木兔に「そろそろ」だと教えられた翌日のことである。咳がでたり喉に痛みがあるわけでもないが、四十度近くまで熱が上がり、とにかく体が怠くて布団から起き上がることすら億劫になった。

熱が一向に下がらない状態が続いた三日目の朝、赤葦はかかりつけ医院の内科ではなく、パース専門科を受診した。インフルエンザに罹るところか風邪すらめったにひいたことのない健康体だ、この体調不良で思い当たる原因がヒートぐらいしかなかったからだ。

パース科での診察は、医師に症状を伝えたり心音を聴かれたりと、内科での診察とほぼ変わらない。ただ少し違う部分を挙げるとすれば、性に関する質問をあからさまにされるところだろうか。体に症状が出てから性欲が増えたかどうか、ここ数ヶ月から数週間間に性交をしたかどうかなど、部活に専心していて、性的なことあまり免疫のない赤葦にとっては口籠りたくなるような質問ばかりである。

隠したり嘘をついたりしても意味はないので、医師に訊かれたことを正直に答えて出た診察結果は赤葦の予想した通り、ヒートが原因で体調が崩れたというものだ。

ただ、今までよりも重いヒート症状がでた理由を説明された時、赤葦は少しショックを受けた。

オメガ性の男性と、アルファやベータ性の男性の体の造りには決定的な違いがある。直腸の奥に、女性の子宮にあたる生殖器官を有しているか否かだ。

バースがオメガに変異しても、体の造りが数日でがらりと変わるわけではない。ゆっくりと時間をかけて、オメガ男性特有のその器官が造られていく。

今まで赤葦のヒートが軽かったのは、体がオメガに造り変えられている過程だったからで。完全にオメガの体になった今、それまでの反動が一気にきたということらしい。

オメガ性や女性を蔑視するつもりはないのだが、自分が子どもを産める体になったということが、男として、少し複雑な気分だった。実感が湧かないというのが一番近いだろうか。

バース科を受診した後も、赤葦の熱が完全に平熱にまで下がることはなく、結局一週間も学校を休んでしまっていた。

ヒートが原因なので、いつもより強めの抑制剤を処方されたが、熱が少し下がっただけであまり効果はなかった。

長く続いている熱のせいか体が怠く関節が軋み、頭の中にかかった靄がとれない。やたらと喉が渴いて、空腹でもないのに飢餓感が激しい。それがヒート特有の症状、つまり発

情のサインであり、性欲が高まっている状態なのだと言われたが、赤葦にはいまいちピンときていない。

年頃の普通の男子高校生なりに、性的なことに興味がないこともないけれど、他人と一度も肌を合わせたことがなく決まった相手もない赤葦にとっては、高まった性欲の解消法など自慰をすること以外に思いつかなかった。

「若い君には言いにくいことなんです」と医師は苦笑しながら前置きをして、体調を整えるにはどんな薬よりも、アルファのフェロモンを嗅ぐのが有効なこと、もっと具体的に言えば性交することが一番効果があるのだと言った。

「アルファなら誰でもいい——と言ってしまえばそうなんだけど、京治くんの場合、やっぱり、タオルの人に協力してもらおうのが一番だと思う。変異に影響を与えたアルファのフェロモンが一番有効なはずだから」

とも続けた。『タオルの人』とは、言わずもがな木兎のことだ。

赤葦のバース変異が、強烈なアルファ性である木兎に影響されてのものであることは明らかだ。そして木兎のアルファフェロモンが有効なのはもう、今までの経験からわかっている。医師にそれを教えられるずっと前から、彼の匂いのついた私物を借りてヒート症状を軽減させてきていたのだから。

赤葦がバレーボールに熱中していて、抑制剤の副作用を避けたいと強く思っていることを知っているからこそその医師の助言だとわかつてはいる。

しかし恋人でもないただの部活の先輩に、これ以上どう協力してもらえと言うのだろうか。自分とセックスしてくれと頼めとでも言うのか。冗談だろう。

「簡単に言うなよ……」

初老の医師の顔を脳裏に浮かべて恨めしく思いながら、赤葦は小さく悪態を吐いた。

枕元に置いてあったスマホが、メッセージの受信を告げる。学校を休んで寝込んでいるこの一週間、決まった時間になると何回か続けてメッセージが送られてくるのだ。

スマホを持ち上げるのも億劫で発信者は確認していないが、これは間違いないと木兎だろう。メッセージの内容は、体調を窺うものとトスの催促だと容易に想像できる。

霽がかかってぼんやりとした頭に、軽快な電子音がびこびこ響いて煩わしい。……煩わしいのだが、スマホの電源を落としてしまうことはできなかった。

木兎が自分を気にかけてくれるのが単純に嬉しいのだ。

木兎の望むトスを上げるセッターが赤葦以外にいないからかもしれないが、木兎にトスを上げることが目標に入部当初から頑張り続けてきた赤葦にとっては、そんなことは問題



ではなかった。

インハイ前の大事な時に一週間も穴をあけてしまつて申し訳ない……、などと考えながらうつらうつらしていると、自室のドアをノックする音と母親の声が聞こえて、その後「うわっ」と、とても聞きたかつた人の声が続いた。

今日も部活はあるはずなのに、なぜ木兔がここにいるんだろうという疑問と、大丈夫かなあという思いが頭の中をぐるぐると回る。

他人のフェロモンのせいで自分自身がコントロールできなくなるなんて嫌だ——と、いったつだったか、木兔が眉を顰めていたことがあった。まだ赤葦のバースが変異する前の話で、アルファはアルファで大変なこともあるのだなど、赤葦は他人事のようにそれを聞いていた。

身内である両親には感じられないだろうが、今赤葦の部屋は噓せかえるほどのオメガフェロモンが充満しているはずだ。

「ごゆっくり」とかなんとか、母親の残していった呑気な台詞に少し呆れる。生粋のアルファが、オメガの誘引フェロモンに満ちた部屋でゆっくりなどしていられるはずがないのに。

自分の危機意識の薄さは母親譲りかもしれないな……とまた他人事のように考えていた

ら、母親が閉めていった部屋のドアを木兎が大きく開け放った。

「エアコンの冷氣逃げちゃうと思うけど、ごめん、閉め切ってたら、ちょっとヤバイから……」

苦笑しながら赤葦の寝ているベッドまで寄ってきて、赤葦から一番遠い、足元側の縁に腰を下ろす。

「においますか？」

できるだけ普段通りを装って訊ねれば、「だからヤバイレベルだってば」と木兎は肩を竦めた。

「自分じゃどの程度のものか、どんな匂いなのかもわかんないんですけどね……」

「他のアルファがどれだけ気づくのかは知らないけど、俺は赤葦の家に入った時からおまへの匂いに気づいたよ。すげーいい匂いだけど、なんかすげー腹が減るし、すげーノドが渴くから困る」

「俺のヒートがそろそろだって言ったの木兎さんでしょ。困るのわかってるのに、なんで来るんすか……」

「赤葦元気かなーって思ってた」

「元気じゃないから休んでるんですけど」

「だよなー。……でも顔が見たかった」

「……………」

俺もです、とうっかり言ってしまうそうになって、慌てて言葉を飲みこむ。

パーソナルスペースが狭くて誰にでも気さくな人だと知ってはいるが、いつもながら、口説き文句にも取れるようなことをなんの銜いもなく言ってしまうところがすごいと思う。

木兔の台詞は軽く受け流し、体調を心配して大事な部活をさぼってまで見舞いに来てくれたことに対しての礼のつもりで、木兔が望んでいそうな言葉を赤葦は口にした。

「今まで軽かった分のツケが一気にきたみたいで、葉も効きにくいんすよ。……でも、あと何日かしたら元通りになると思います。そしたら木兔さんの自主練にいっぱい付き合いますから」

「ん。待ってる」

声音からは喜んでくれているのが感じられるのだけれど、木兔が遠かった。物理的にも心理的にも、木兔との間にはつきりとした距離がある。発情期中のオメガとアルファの間には当然必要な距離だとわかっていても、それがもどかしくて仕方がない。

「木兔さん」

「なに」

「遠くて話しづらいんですけど」

「あー……、うん」

困らせるのを承知で赤葦は木兎の名前を呼んだ。

危機意識、と頭の隅で囁いた理性は無視する。

うん、と答えながらも木兎は赤葦の足元から動こうとしない。それどころか部屋に入ってきた時から赤葦のほうをまともに見ようともしないのだ。

……顔が見たかったって言ったくせに。

上掛けの横から手を出して、傍に来てくれの意味でベッドをぼんぼんと叩くと、木兎が息を呑む気配がした。

もう一度「木兎さん」と名前を呼ぶと、仕方がないなどでも言いたげに大きな溜め息を吐きながら、赤葦のすぐ脇に座り直した。

ワガママを言いたくなるのは熱のせいだ。仕方がない。

ようやくちゃんと顔が見えて、目が合ってホッとしたのも束の間、木兎の眉がしよぼくれモードの時のようにシュンと下がったので、自分がどれだけ酷い顔をしているのかと気になった。女子ではないし、常に見た目を気にしているような繊細な性格でもないが、あ

まりに酷いと木兔に思われるのはさすがに嫌だ。

「すげーキツそう」

「……そツスね。今回は、まじでキツイ」

木兔の大きな手が赤葦の髪を優しく梳いてから頬を撫でる。体温が上がっているせいで、いつもは熱い木兔の手が冷たく感じて心地良い。無意識で彼の手の平に頬を擦りつけるような仕草をしてしまう。それと同時に、間近になった木兔の匂いを胸いっぱい吸いこんだ。喉の渴きはなくならないが、寝込み始めてからずっとぼんやりと胸に抱えていた不安感や焦燥感が薄れていくのを感じる。

「それならもっと早く、今みたいに俺を呼べばよかっただろ」

「……………え…?」

耳元で低く囁かれた言葉の意味に気づいた時には、木兔の顔がすぐ目の前にあつた。金色の瞳に見据えられ、瞬きもできない。

「ぼ…くとさ……」

「ちよっとおとなしくしてろ」

制止の言葉を発する間もなく唇が塞がれた。おとなしくしていろなどと言われるまでもない。ただ頬に手を添えられていただけなのに、ほんの少しの身じろぎすらもままならな

くなつた。

「くち、あけて」

引き結んでいた唇のあわいを木兎の舌先が撫でる。言われた通りにおずおずと口を開けば、肉厚の舌が口内に侵入して赤葦のそれに触れる。その瞬間、ぞくぞくとした刺激が背筋に走った。

「ん……ん……」

舌が絡まるたびに、とろりとした甘さを感じる。木兎の唾液だろうか。飴玉よりも生クリームよりも甘いけれど、ずっと味わっていたくなる甘さだった。赤葦は自分からも舌を差し出して木兎の舌に夢中で擦りつけた。

「んっ……ん……ん……」

重なった唇の隙間から切なげな声を漏らしながら、覆い被さっている木兎から注ぎ込まれる甘い唾液を飲み込む。酒に酔う感覚はまだ知らないが、きつとこんな感覚なのではないかと思う。体温が上がって、体がふわふわして、頭はくらくらしている。

生まれて初めてした他人との粘膜の接触は、熱くて甘くて激しくて、でも、とても気持ちの良いものだった。

もちろんそれは、相手が赤葦のバース変異に影響を与えた特別なアルファである木兎だ

から——なのであろうが。

ゆつくりと離れていく木兔の唇を見つめていたら、戻ってきたそれがおまけのようにチユツと音を立てて口づけて、また離れていった。……もつとしたいと思っていたのが伝わってしまったのかもしれない。

「少しはラクになったか？」

「わか……らない……」

木兔に会って木兔の匂いを嗅いで、気持ちはず分ラクになった。しかし体が、体の奥がもっと木兔が欲しいと騒いでいるのがわかる。木兔の姿が滲んで見えるのは自分の目が潤んでいるからだだろう。全身が火照り、吐息は熱く、激しい鼓動がドクドクと頭の中にまで響いている。腰の奥には重たい熱が溜まり、性器も芯を持ち始めていた。それに加えて、自分の後孔がしつとりと濡れているのはつきり感じている。

これが本来のヒートの状態なのだと、発情しているのだと赤葦は理解した——つもりだった。

「あんな、今までのツケが一気にきたってさつき言ってたけど、たぶんこれ、一番重い状態じゃねえよ。まだおまえ、頭はつきりしてるだろ？」

「なんか……ぼーっとは……してまずけど」

木兔の言葉に驚いてたどたどしく返す。これ以上に重い状態とは一体どんなだろうか？と背を震わせていると、赤葦が考えていることがわかったのか、苦虫を噛み潰したような顔で木兔が吐き捨てた。

「もう、やることしか考えられなくなるんだよ」

木兔らしくない荒い口調に赤葦は目を瞬かせる。バレエの練習や試合などで気が昂ぶった時以外、木兔が声を荒げることはほとんどないからだ。

「いや、まあ……俺は今もわりとギリギリな感じだけど」

言葉通り、股間が張りつめているのがズボンの上からでもわかる。一番重い状態のものではないのかもしれないが、赤葦の濃厚な誘引フェロモンを浴び続けているからだ。

たとえ今ここで木兔が赤葦に襲い掛かっても不思議はない状況で、そうなったとしてもアルファの木兔に非はなく、責められることもない。それほどオメガの誘引フェロモンがアルファに及ぼす影響は強いと言われている。

しかし以前木兔本人が言っていたように、自分の意識が自分の意思以外のものに支配されるのが嫌なのだろう。ましてやその相手は、目を掛けているとは言えただの部活の後輩だ。

木兔は強力な精神力で理性を保ち、凶暴な欲望を抑え込みながら、赤葦のヒート症状を



軽減してくれようとしている。そこに一抹の寂しさも感じないと言ったら嘘になるが、感謝こそすれ、文句を言える立場ではないのだ。

「木兔さ——」

「ああーごめん。さすがにそろそろ限界だわ」

「え…」

おもむろに立ち上がり、ネクタイを解きワイシャツのボタンを外し始めた木兔をギョツとして見つめたまま固まっていると、木兔は脱いだシャツを赤葦へと差し出した。

「ほら」

「ぼくとさん……」

「そんなもんでも、ないよりマシだろ」

確かにさっきのキスよりは弱いかもしれないが、抑制剤よりはずっといい効果があるであらうことはわかっている。

「木兔さんは半裸で帰るんですか？」

「それじゃケーサツに捕まるじゃん。おまえのシャツ貸してよ」

「あ、はい。じゃあそれを、どうぞ」

母がアイロンをかけ、壁に掛けてくれていたワイシャツを指差す。

両腕を通し、いつものように首から三つ目までのボタンをしめたところで木兎が笑った。「はは。なんかちよつとキツイ」

「……うるさいですよ。嫌なら半裸でお帰りください」

普段はLサイズの赤葦のシャツよりもワンサイズ大きいサイズの物を着ているのだろう、肩や胸のあたりが少し窮屈そうに見える。身長はそれほど違わないのに、骨格や体の厚みがまったく違うのだ。

「ていうかさ……、帰る時赤葦のお母さんにココ見られるのやばくない？ もう俺、赤葦ん家に入れてもらえなくなっちゃうかも」

苦笑しながら視線を自分の股間のほうへと下げる。木兎のソコは依然として強く存在を主張していた。

「うちの母親、そういうの気づかないっていうか、気にしなさそうですけど……」

「んー。それはわからないでもない。見た目もそうだけど、おまえ、性格もお母さん似たろ」

「……否定できないですね」

理性的で神経質そうだとよく人に言われるが、口数がそれほど多くなく無駄なことをしたくない（そしてしない）から落ち着いて見えるだけで、実際はわりと大雑把で図太く、

抜けているところがある。発情期真っ只中で動けない息子の部屋にアルファを通し「ごゆつくり」などと言ってしまうような無頓着な母親と、見た目も性格も案外似ていることに今日はつきり気づいてしまった。

「まあうちの母親は大丈夫として、まだ明るいですけど、帰る途中はどうするんですか？」  
「だよな……」

ワイシャツの裾をズボンから出してはいるが、盛り上がった股間を覆い隠せてはいない。夕方のこの明るい時間に、股間を膨らめたまま外を歩くのは如何なものだろう。不審者認定される、悪くすれば捕まる、のは間違いない。

そして自然と治まるのを待つには、木兔のソレは少々……いや、かなり育ちすぎている気がした。

だから、木兔が困っているから、手助けしたいから——、ただ単純にそれだけで発した一言だった。

「えーと……、抜いて……いきますか？ なんなら俺、手伝いますけど……」

「は？」

「だから、手で……とか」

指で輪を作った手を上掛けから出し、くいくいっと上下に動かしてみせたので、木兔は

ギョツとしたように目を見開いた。赤葦は完全に無自覚であったが。

「ばか。それだけじゃ済まなくなるに決まってるんだろ」

「はあ」

「おい。あんまわかってねーな？」

「いや、まあ、……はい」

ほんとおまえは、もう……と、木兎は溜め息とともに力なく何度も繰り返していた。

ちなみに木兎が帰った後冷静になった赤葦は、確かにアレは手助けだ、しかもなんで俺が手伝うんだよ、と若干的の外れた考えに思い至り、羞恥で死にそうになって、布団の中で激しく悶えていた。

赤葦は今日、「発情」というものがどういふものなのかを身をもって知った。アルファのフェロモンや本能の誘惑が、どれほど甘美で抗い難いものであるかも、だ。

しかし、生殖の本能に意識を支配され、その行為にひたすら没頭するしかなくなるなんて、まるで理性の欠片もない獣のようで嫌だと思った。木兎が言う通り、他人のフェロモンのせいで自分自身がコントロールできなくなるのも気味が悪いと思う。

今の赤葦のヒートはまだ、最悪の状態ではないのだと教えられた。木兔が言う「一番悪い状態」になった時に自分がどうなってしまうのか、想像すらつかないのが恐ろしい。

そして、今回のヒートでだって肉体的にも精神的にもかなりのダメージを受けたというのに、これ以上の苦痛があるのかと思うと、大袈裟ではなく、絶望で目の前が真っ暗になった。

『オメガのバイオリズムの調整には、どんな薬よりもアルファのフェロモンを嗅ぐこと、もしくはアルファと性交することが有効である』

そう言っていたバース科の医師の言葉が頭の中でずつとりピートしている。

木兔は純粹に善意だけで、これまで赤葦のヒート症状の軽減に協力してくれていた。

今までできてもらったように、いや、今まで以上に木兔に頼り甘えてしまえと囁く本能と、これ以上彼をバレー以外のことで煩わせるなど抗議する理性が、熱で茹った脳内で激しく闘ぎ合って——、辛うじて理性が勝った。

今日、発情中のオメガである赤葦とアルファの木兔の間に何事もなかったのは、ただ赤葦のヒートが一番重い状態ではなかったから、そして木兔が強靱な精神力で本能を抑え込んだからだ。

もし次に今日と同じような状況になった場合、赤葦が最悪のヒート状態になって理性を

失ってしまった場合、獣のように浅ましくアルファを誘う赤葦の姿を見て木兎は幻滅するのだろう。

そもそも赤葦の誘引フェロモンのせいで木兎が我を失ってしまったら――、その原因になった赤葦を疎ましく思うに違いないのだ。

そんなのはとても耐えられそうにない。

しかし赤葦は気づいてしまった。

ベータよりも圧倒的に数が少ないとはいえ、アルファはなにも木兎だけではない。

ヒートの抑制やオメガのバイオリズムの調整は、どのアルファのフェロモンでも有効だと医師も言っていた。

だったら木兎以外のアルファを探して、手助けしてもらえばいいのだ。

それで木兎に幻滅されず、疎ましがられず、ヒートによる不調も克服できる。バースに振り回されることなくバレーに集中できる。

こんなに素晴らしい案はないと思えた。